青春の残像

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青春の残像

【Ｎコード】
Ｎ４４６０Ｉ

【作者名】
栗原峰幸

【あらすじ】
僕は同窓会で高校時代に付き合っていた真理と再会する。やっと返してもらえたビートルズのＣＤ。長い年月の間にお互いの立場が出来上がっていた。

その日、二十年振に高校三年の時のクラスメイトが集まった。同窓会というやつだ。
上座に恩師を迎え、当時のクラス委員長だった幹事代表が挨拶をする。
僕は周りをグルリと見回した。今でもはっきりと覚えている奴もいれば、名前はおろか顔すら思い出せない人もいる。特に女性の多くは姓も変わってしまっている場合が多い。なにせ二十年だ。

そんな中でも僕が真理の姿を見逃すはずがなかった。真理は僕の座っているテーブルの、ひとつ向こうのテーブルに座って、こちらを向いている。真理だって僕に気付いているに違いない。彼女も僕の方を時折、チラチラと見ている。
僕と真理は高校生の時、恋人同士として交際し、青春の1ページをお互いの胸に刻んだ仲だった。
高校卒業と同時に、僕は大学に進学した。しかし真理は大学受験に失敗し、浪人してしまったのである。そこから二人の仲は急速に冷え始め、恋人関係は自然消滅した。
思い返せば、二人の関係に明確なピリオドがあるわけでもなかった。ただ、僕はもう既に結婚し、二児の父である。真理もまた、幹事に紹介された時、名字が変わっていた。

僕は周囲の話に相槌を打ち、適当にビールを注ぎながら真理の方を見ていた。
真理はシックなスーツに身を固め、随分と落ち着いた雰囲気を醸し出している。時折見せる慈愛にも似た眼差しは、彼女がおそらくは母となっていることを物語っていた。それでいて「女」を失っていない色香が漂っている。

（上手に歳を取ったな……）
そういう僕はどうだろう。今でも「男」としての魅力を兼ね備えているだろうか。朝６時に家を出て、帰宅はいつも深夜。土日は疲れ果て、まともに自分の子供とも遊べない。家族を養うために働いているのに、実感として手元にあるのは、延べ三十五年の住宅ローンだけだ。そんな男はやつれていないだろうか。

やがて宴たけなわとなり、みんなはそれぞれビール瓶や徳利を持って思い思いに席を立ち、特に仲の良かった旧友との思い出話に花を咲かせ始める。
僕は真理のところへ行きたい気もした。だが正直、怖かった。
僕が一人、手酌でビールを啜っていると、横でふっと上品な香水の匂いがした。横を見ると隣に真理が座っている。笑うでもなく、怒るでもないその表情。敢えて言うなれば、戸惑いの表情とでも言おうか。
「お久しぶりね。元気にしていた？」
「ああ、久しぶり。元気だよ……」
僕の口調はいささかぶっきら棒だったかもしれない。本当はもっと温かく迎え、話したいこともあるのに。
「今日ね、どうしてもあなたに返したいものがあるのよ」
真理が困惑したような表情で僕を見つめる。
「僕に？」
唐突に真理から「返したいものがある」などと言われ、僕も困惑した。
（一体、何だろう？）
僕はハンドバッグをまさぐる真理の手に注目した。やがてバッグから引き抜かれた彼女の手には、一枚のＣＤが握られていた。
「あなたから借りたＴＨＥ　ＢＥＡＴＬＥＳのＣＤ……。今まで返しそびれちゃっていて、ごめんなさい……」
「あっ、ＲＵＢＢＥＲ　ＳＯＵＬ……」

それは僕が高校時代に買い、真理に貸したCDだった。当時はCDがようやく普及し始めた頃だった。真理はこのRUBBER SOULというアルバムの「IN MY LIFE」という曲がお気に入りだった。

僕は大学に入ってから、アルバイトで稼いだお金でTHE BEATLESのアルバムを揃えたが、RUBBER SOULだけは買う気になれなかった。それは高校時代に清算せずに置き忘れてきた、真理との想い出を上書きできなかったからだ。まるで永久欠番のように、RUBBER SOULだけ揃わなかったのである。

僕は真理の少し肌のキメが粗くなった手からRUBBER SOULを受け取った。同時に走馬灯のように真理との想い出が頭の中を駆け巡る。

河原の葦原で隠れるようにして、初めて重ねた唇と唇。何とかベリーのような甘酸っぱい味がしたっけ。

僕の部屋でよく聴いたTHE BEATLES。とりわけよく聴いたアルバムがRUBBER SOULだ。真理が何度も「IN MY LIFE」をおねだりしたっけ。

そして僕らは磁石が引き合うように、自然と肌と肌を重ね合った。まだ青くて蕾だった真理。まだ樹にならない青い茎だった僕。それでも夢中だった。僕は真理の白く、柔らかい身体を何回抱いただろうか。

真理の身体の特徴を言えと言われれば、今でも言うことはできる。それは二十年前に置き忘れてきた記憶だった。

それが今、RUBBER SOULとともに戻ってきたのだ。

そして最後に真理が付け加えた「ごめんなさい」という言葉に、僕は二十年間を埋める温もりを感じていた。

「まだ十分若いけど、君は綺麗に歳を重ねたね」

僕のその言葉に、真理の身体がビクッと跳ねたのがわかった。そ

れはおそらく僕にしかわからなかっただろう。かつて肌を重ねた者同士にしかわからないこともある。
「いや、別に変な意味じゃないよ……」
僕は慌てて弁解をした。別に真理をどうこうしようなんて気は今更ない。ただ、僕しか知らなかったはずの真理を抱く、彼女の夫にまったく嫉妬しなかったと言ったら嘘になるだろう。男とはそんな生き物ではないかとも思う。逆に真理は僕に妻がいると知ったらどう思うだろうか。
「君も結婚しているんだろう？　僕も結婚して子供が二人いるんだ」
ようやく真理の顔から緊張が解け、頬が緩んだ。
「そうだったんだ。坂井君、今は何をやってるの？」
真理が笑顔で尋ねる。
「ふふ、普通のサラリーマンさ。ちょうどバブルが弾ける直前だったから、うちらの世代はラッキーだったかもね。でも苦労するよ。下手するとリストラだもんね」
僕も真理に笑顔を返す。もう真理に何を話しても大丈夫だろう。
「私も子供がいるの。一人だけどね」
「そうかぁ……。お互いにそれぞれの道を歩み始めて、それなりに経つんだなぁ……。僕はこれからも、会社の往復と住宅ローンだよ」
僕は真理にビールを勧める。真理はコップに金色の泡を受けながら言った。
「私も子育てしながら働いているんだけど、ＰＴＡに駆り出されたりして、それなりに大変なのよ」
そう言う真理の言葉は決して嫌みでも、悲観的でもなかった。むしろ、サラッと笑うように言って退けた。
「幸福かい？」
「えっ？　ええ、とても幸福よ」
真理は一瞬、びっくりしたような顔を覗かせた後、目尻を下げて微笑んだ。
「僕も何だかんだ言っても幸福さ。みんな、家族と自分の生活を守

りながら、今を精一杯生きているんだ。お互いに無理せずに頑張ろうな」
「そうね……」
僕と真理は見つめ合った。それは未精算だった恋人同士の関係を解消し、お互いに忘れられない時間を共有した、男と女の友人同士のエールの交換でもあった。
青春の残像が未来への活性剤になった瞬間だった。

「宴たけなわではございますが……」
幹事がマイクに向かった。次の同窓会は五年後に行われるという。会場を後にする時、今度は僕から真理に話しかけた。
「五年後を楽しみにしてるよ」
「私も楽しみにしてるわ」
五年を待たずして、会おうと思えば会うことは可能だろう。だがそれはお互いの望むところではない。街で偶然会えば会釈くらいはするだろうが、五年後に公式の場で再会したいものだ。
「じゃあ、元気でな」
「坂井君もね」
背中を向けた真理を見送る僕の心に、清々しいそよ風が吹いた。
五年後に再会した時の真理も、きっと素敵に歳を重ねているに違いない。僕はそう信じていた。
僕は背中に遠ざかるヒールの音を聴きながら、セカンドバッグの上からＲＵＢＢＥＲ　ＳＯＵＬのＣＤを確かめる。これでＴＨＥ　ＢＥＡＴＬＥＳのＣＤが全部揃った。同時に僕の未精算の過去というパズルがひとつ埋まった。
今夜は子供が寝た後、ひとりで「ＩＮ　ＭＹ　ＬＩＦＥ」を聴こう。しばし青春の残像に酔った後、未来を生きていくために。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4460i/

青春の残像

2010年10月8日15時09分発行